

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 23 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593359

研究課題名(和文) 保育園における「気になる子ども」の早期支援を目的としたアセスメントツールの開発

研究課題名(英文) Development of assessment tool used by the nursery teacher at nursery for 'children with special care needs'

研究代表者

津田 朗子 (TSUDA, Akiko)

金沢大学・保健学系・准教授

研究者番号：40272984

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：保育園で保育士が活用できる「気になる子ども」のアセスメントツールを作成し、それを用いて保育園児453名を対象に、担任保育士による定期的なアセスメントを1年にわたり実施した。

「気になる子ども」は19.6%にみられ、その割合は男児が有意に高かった。「気になる子ども」の行動特性は、社会性の低さ、落ち着きなさ、過敏性、自閉傾向などに分類された。個人の分析結果を縦断的に視覚化することにより、障害を思わせる特性パターンが抽出された。また「気になる子ども」の親は子どもとの関わりに困難感を感じる一方で、子どもへの関わりが中途半端と評価される者が多く、親子関係の問題も示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is, that by elucidating the problems of "children with special care needs" and then to develop assessment tool, which can be utilized by nursery teacher at nursery to assess them.

Four-hundred forty three children were evaluated by the nursery teachers for one year. The ratio of "children with special care needs" was 19.6%, regarding the gender ratio, boys 30.7% and girls 8.2%, thus boys were significantly higher. Behavioral characteristics of "children with special care needs" have been classified, such as low of society, hyperactivity, hyper sensitivity, and autistic tendency. In addition, some patterns reminiscent of a disorder has been extracted. The parents of such children often felt difficulty to involvement with the child, and there were the indicative of the parent-child relationship problem.

研究分野：小児保健学

キーワード：気になる子ども 発達障害 早期発見 保育園

1. 研究開始当初の背景

近年、保育園では行動異常や対人社会性の問題等を抱え発達障害を疑われる「気になる子ども」が多数報告されている。このような子どもは、幼少期より「育てにくさ」や「関わりにくさ」などの問題を抱えているが、彼らの特徴は周囲の者に理解されにくいいため、周囲の不適切な対応による二次的障害を引き起こし、就学後の学級崩壊や思春期以降の反社会的行動など、より深刻な問題に発展することもある。そのため、可能な限り早期に発見し支援を開始することが求められる。厚生労働省によると、発達障害は、健診だけでは発見が難しく、保育園など集団生活の場での「気づき」により発見されることが少なくない。したがって、乳幼児期の子どもたちが多くの時間を集団で過ごす保育園では、従来の保育・幼児教育機関としての役割に加え、子どもの健全な発達を保障するための問題の早期発見・早期介入も重要な役割となっている。しかし、これまでの保育園の実態調査からは、発達障害を疑われるような「気になる子ども」が多数報告される一方で、その対応には苦慮している実態が多数報告されている。

そのような状況を受け、研究者らは保育園における「気になる子ども」の早期発見・早期介入を阻害する要因を明らかにするため、2009～2010年、保育園の保育士を対象に全国調査を行った。その結果、クラスに「気になる子ども」がいると答えた保育士は1歳児以上のクラスでは約8割を超え、保育士がごく早い時期から子どもの「気になる」兆候に気付いていることが明らかとなった。その一方で、子どもの「気になる」行動やその判断の根拠、生じている問題や介入の方向性などについて、保育園内で共通認識のできるアセスメントツールや記録様式等を活用している保育園はほとんどみられなかった。そのため、保育士は自らの判断に自信が持てないまま、対応に苦慮している実態が明らかとなった。

一方、現代の親は、過去に子どもと関わった経験が少なく一般的な子どもの発達を理解していないため、子どもが抱える問題に気づいていないことが多く、また、問題を否認する傾向も強い。特に、発達障害児は幼少期から親が育てにくさを感じる事が多く、親子関係の問題を生じやすい。さらに親の中には、自身の親との愛着に世代間連鎖を抱えた者もあり、そのような親からの適切でない関わりは、子どもの発達に歪みを生じ、発達障害と同様に問題行動を示す場合もある。このように、「気になる子ども」の問題の背景には、親子関係から生じる問題や、周囲の大人の関わり方の未熟さから生じる対人関係の問題が関連し、それに子ども生来の性格や年齢的な特徴等の個人差が加わることにより、問題がより複雑になっていると考えられる。

したがって、このような親子への支援に際しては、子どもの発達状況と、親子関係、生

活環境など、幅広い視点で総合的にアセスメントし、子どもの潜在的なニーズを評価する必要がある。

しかし現在、多くの子どもが生活する集団生活の場である保育園で、親子への介入の機会が最もある保育園の保育士が活用可能なツールはない。そのため、保育士の気付きは単なる経験的な直観として扱われ、有効な情報として支援に活用されていない。

2. 研究の目的

そこで、本研究は、「気になる子ども」への早期支援を可能にするために、保育園等で保育士が親子関係の問題なども範疇に入れた幅広い視点で、今後発達障害の可能性のある「気になる子ども」に対し早期発見・介入を行うことのできるためのアセスメントツールを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 「気になる子ども」のアセスメントツールの作成

高機能・広汎性発達障害児の子どもの行動特性を反映した評価項目

研修者らの全国調査の成果を基に、先行文献も参考に各発達年齢で見られる子どもの問題行動をリストアップし、各年齢で展開される保育場面で評価しやすいよう表現を調整し、発達障害児の子どもの行動特性を反映した評価項目を作成する。

親子関係の質を反映した評価項目

研究者らが子育て中の親を対象に2002年に実施した全国調査の成果を活用し、保育士が客観的に評価可能な項目を設定する。

(2) ツールの実施と評価

対象：対象は障害児保育を実施している5箇所の提携保育園に通園する子ども453名（A保育園；園児180名、B保育園；園児94名、C保育園；園児87名、D保育園；園児42名、E保育園；園児50名）

評価方法：年齢ごとに作成したアセスメントシートを用い、評価はクラス担任保育士が実施する。0歳児クラスは1か月毎、1～5歳児クラスは3か月毎に1年間実施する。

分析方法

基礎データの分析には、横断的データ（9月時点：1～5歳児では2回目調査時期にあたる）を使用した。気になる子どもの年齢別割合比較には²検定、各アセスメント項目の年齢別比較にはKruskal-Wallis検定、気になる子どもとそれ以外の子ども（以下健常児）との得点比較にはMann-WhitneyのU検定を行った。気になる行動特性は年齢別に因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、因子負荷量は0.40以上を採用した。気になる子どもと健常児の因子得点の比較にはt検定を用いた。縦断的分析では、0歳児では1か月ごと、1～5歳児では3か月毎計4回の調査を行った。個人の行動特性の変化をグラフで可視化した。因子得点の比較には対応のある

t 検定を用いた。分析には SPSS Ver.23.0 を用い、有意水準は 5%未満とした。

倫理的配慮

金沢大学医学倫理委員会の承認を得て実施した。データは照合表を用いて連結可能匿名化し、特定のパソコンを用いパスワードをかけ USB メモリに保存した。記録物は施錠可能な保管庫に施錠して厳重に管理した。

4. 研究成果

(1) アセスメントツールの作成

アセスメントツールは研究者らが行った全国調査の成果から得られた問題行動のリスト、及び先行研究を参考に、研究者間で検討を重ね、高機能・広汎性発達障害児の子ども の行動特性を反映した項目を含む評価項目を作成した。評価項目は、各発達年齢で特徴的にみられる発達のポイントを加え、保育場面で評価しやすいよう、保育に精通する児童心理学の専門家からの助言により修正した後、信頼性の検討を行い、7回の改定を得た結果、0歳児41項目、1歳児51項目、2歳児48項目、3歳児51項目、4・5歳児(共通)51項目により構成されるツールが作成された。いずれも、ことばの発達、運動発達、生活、遊び、性格・癖・行動特性、親子関係の6領域で構成され、評価はよくある(6点) ある(5点) 時々ある(4点) あまりない(3点) ない(2点) 全くない(1点)の6段階リッカート法を採用した。生活、性格・癖・行動特性、親子関係の領域には、すべての年齢に共通する項目が含まれている。

(2) 基礎データの収集および評価

データ収集

対象児は 453 名(0 歳児 47 名、1 歳児 94 名、2 歳児 85 名、3 歳児 102 名、4 歳児 68 名、5 歳児 57 名) 得られたデータの延べ件数は計 2071 件(0 歳児 425 件、1 歳児 383 件、2 歳児 362 件、3 歳児 400 件、4 歳児 273 件、5 歳児 228 件)であった。

気になる子どもの割合(表)

気になる子どもは、全体の 19.6%にみられ、年齢別では0 歳児 4.3%、1 歳児 21.3%、2 歳児 24.7%、3 歳児 16.7%、4 歳児 22.1%、5 歳児 24.6%、男児 30.7%、女児 8.1%でその割合は男児に有意に高かった。

(3) 気になる子どもと健常児との比較

気になる子どもと健常児の比較により有意差のみられた項目は、1 歳児では「手洗いや手拭きの習慣が身についている(R)」、「物を何かに見立てて遊ぶ(R)」、「大人の話が聞けない」、「奇声をあげる」、「落ち着きなく動き回る」など 11 項目であった。2 歳児では、「偏食がある」、「場所が変わると落ち着かない」、「一人で絵本を見ることが出来る(R)」、「友達との関わりを楽しむ(R)」、「わざとほかの子ども遊びを邪魔する」、「知りたいことを質問する(R)」、「癇癪・パニックを起こす」、「切り替えができない」、「音に敏感に反応する」など 36 項目であった。3 歳児では、

表 年齢別にみた気になる子どもの割合

クラス	性別			気になる子ども			p-value
	全体	男児	女児	全体	男児	女児	
0歳児	47	24(51.1)	23(48.9)	2(4.3)	0(0.0)	2(8.7)	
1歳児	94	45(47.9)	49(52.1)	20(21.3)	13(28.9)	7(14.3)	.084
2歳児	85	45(52.9)	40(47.1)	21(24.7)	16(35.6)	5(12.5)	.014
3歳児	102	50(49.0)	52(51.0)	17(16.7)	13(26.0)	4(7.7)	.013
4歳児	68	36(52.9)	32(47.1)	15(22.1)	15(41.7)	0(0.0)	
5歳児	57	31(54.4)	26(45.6)	14(24.6)	14(45.2)	0(0.0)	
計	453	231(51.0)	222(49.0)	89(19.6)	71(30.7)	18(8.1)	<.001

人数(%), n, 2検定

2 歳児の項目に加え「オウム返しをする」、「独り言を言う」など 35 項目であった。4 歳児では同様に 26 項目、5 歳児では、32 項目であった。なお、(R) は逆転項目を示す。

(4) 発達の評価

アセスメント項目のうち、健康な子どもの発達を示す項目については、「よくある」、「ある」、「時々ある」を「できる」と評価して出現率(通過率)を算出した。0 歳児の結果を示す。「両手でコップから飲む」については、通過率 50%は 11 か月、80%は 13 か月であった。「ちょうどと言うとそれに応じる」については、通過率 50%は 10 か月、80%は 12 か月であった。「指された方を見る」については、通過率 50%は 9 か月、80%は 12 か月であった。

(5) 気になる子どもの行動特性の評価

年齢毎の因子分析結果を以下に示す。

0 歳児

0 歳児の気になる子どもの行動特性は、第 1 因子：過敏性(あやしても泣き止まない、機嫌が悪い、音に敏感に反応する、奇声を上げる、昼寝をしない)、第 2 因子：周囲への関心の低さ(嬉しそうな表情がみられる(R)、表情が乏しい、人や物に関心が無い、話しかけても目が合わない、欲しいものを声を出して求める(R))、第 3 因子：愛着の強さ(母親と別れる時後追いする、人見知りをする)に分類された。月齢と共に愛着の強さが行動にあらわれる様子が確認された(図 1)。

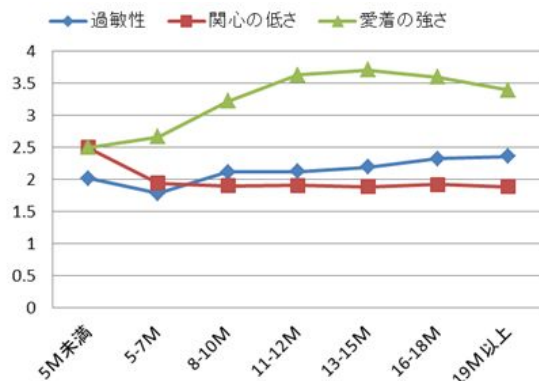


図1 0歳児の行動特性評価

1 歳児

1 歳児の気になる子どもの行動特性は、第 1 因子：衝動性(乱暴である、突発的な行動をとる、癇癪を起こす、奇声を上げる)、第 2 因子：過敏性(手が汚れるのを嫌がる、音に敏感に反応する、衣服の着脱を嫌がる)、第 3 因子：落ち着きなさ(大人の話が聞けない、

落ち着きなく動き回る、場所が変わると落ち着かない) 第4因子: 関心の低さ(表情が乏しい、人や物に興味を示さない、話しかけても目が合わない)に分類された。いずれの因子においても気になる子どもの方が健常児より有意に得点が高かった(図2)。

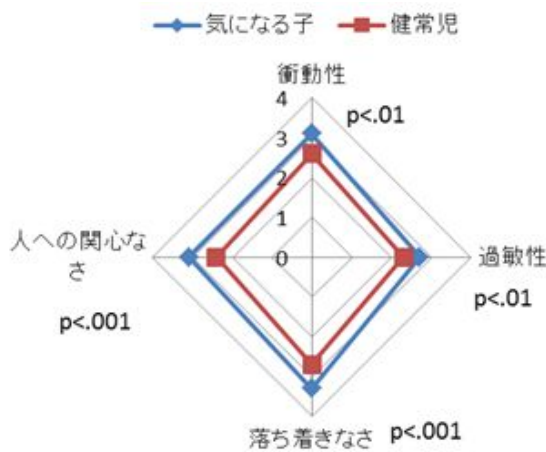


図2 1歳児の行動特性評価

2歳児

2歳児の気になる子どもの行動特性は、第1因子: 社会性の低さ(会話を楽しむ、質問する、友達の名前を呼ぶ、話を理解する、絵本を見る) 第2因子: 落ち着きなさ(乱暴である、突発的な行動をとる、わざと遊びを邪魔する、落ち着きなく動き回る、場所が変わると落ち着かない、切り替えができない) 第3因子: 過敏性(音に敏感に反応する、嫌だった体験を忘れない、手が汚れるのを嫌がる、偏食がある) 第4因子: 自閉的傾向(独り言を言う、オウム返しをする、話しかけても目が合わない) 第5因子: 不器用(ボタンをはめる(R)、細かい遊びを楽しむ(R)、片足で立てる(R))に分類された。いずれの因子においても気になる子どもの方が健常児より有意に得点が高かった(図3)。

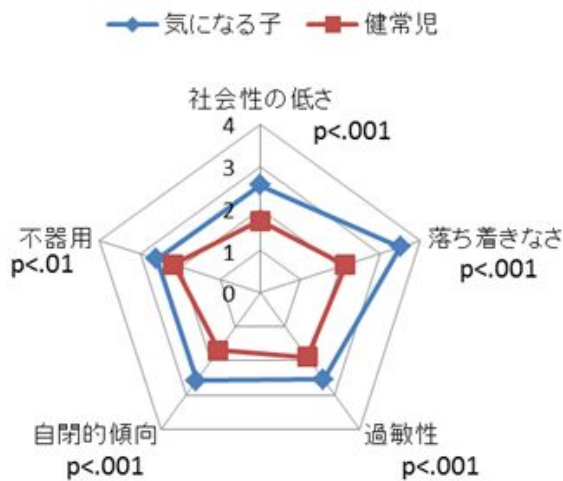


図3 2歳児の行動特性評価

3歳児

3歳児の気になる子どもの行動特性は、第1因子: 社会性の低さ(会話を楽しむ(R)、質問する(R)、ふたつのものの相違点を説明できる(R)、時間の流れを表現ができる(R)、家であったことを話す(R)、遊びのルールを理解している(R)、一人で絵本を楽しむ(R)、友だちとの関わりを楽しむ(R)、衣服の着脱を自分で行う(R)) 第2因子: 落ち着きなさ(集中力が持続しない、細かい作業ができない、話しかけても目が合わない、特徴的な歩き方をする、わずかな高低差につまづく、場所が変わると落ち着かない、大人の話が聞けない) 第3因子: 衝動性(乱暴・攻撃的である、突発的な行動をとる、他の子の嫌がることをする、奇声を上げる、癇癪・パニックを起こす、特異的な動きをする、一番になりたがる、切り替えができない) 第4因子: 自閉的傾向(音に特異的に反応する、独り言を言う、特定のものにこだわる、手が汚れるのを嫌がる、嫌だった体験を忘れない、感情の表出がない)に分類された。いずれの因子においても気になる子どもの方が健常児より有意に得点が高かった(図4)。

4歳児、5歳児においても、因子分析の結果は3歳児に類似していた。いずれも気になる子どもの方が健常児より有意に得点が高かった(図5, 6)。

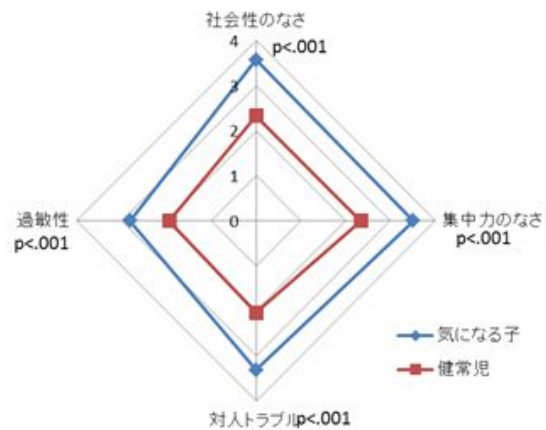


図4 3歳児の行動特性評価

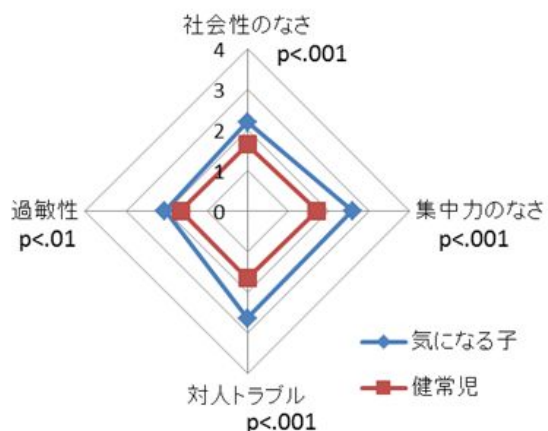


図5 4歳児の行動特性評価

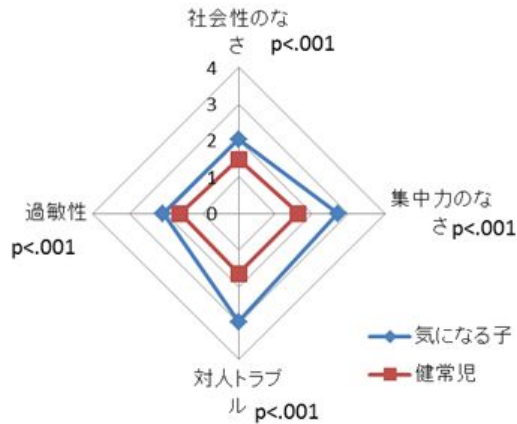


図6 5歳児の行動特性評価

(6) 気になる子どもの行動パターンと障害
 全ての気になる子において、個人の行動特性の変化をグラフで可視化した。3歳児以降になると障害を思わせる特性パターンが抽出、社会性のなさ、集中力のなさ、対人トラブル、過敏性のいずれの特性も強いタイプ(図7) 社会性のなさと集中力のなさが強いタイプ(図8)、社会性のなさは強くないが対人トラブルが強いタイプ(図9)がみられた。また、1年を通して特性に大きな変化がみられなかった子どもがいる一方で、図10、11で示す子どものように、しだいに特性が強くなりなくなる子どももいた。

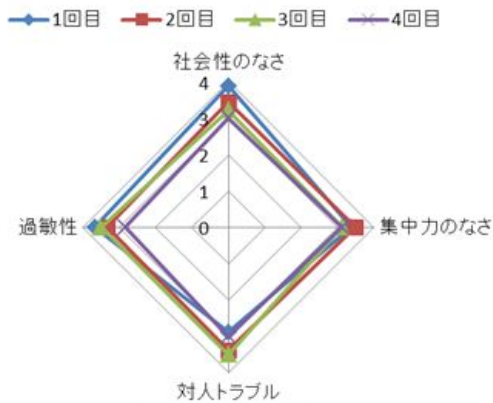


図7 行動特性の推移(3歳男児A)

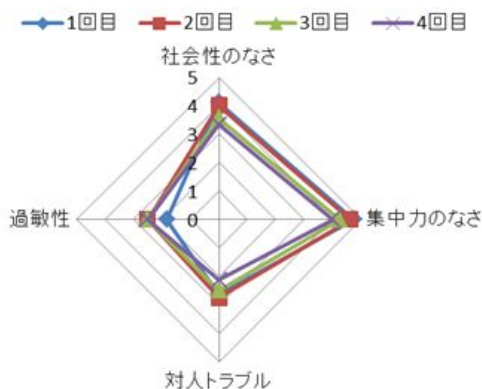


図8 行動特性の推移(3歳男児B)

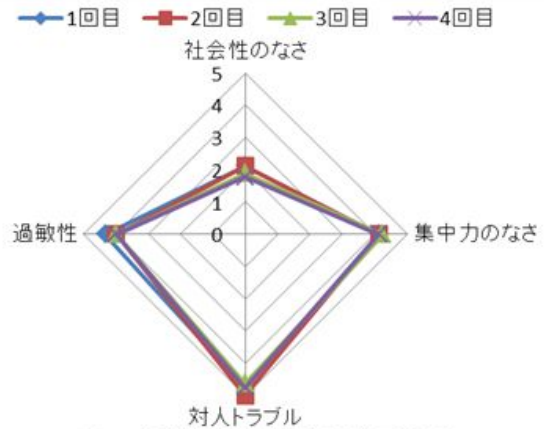


図9 行動特性の推移(3歳男児C)

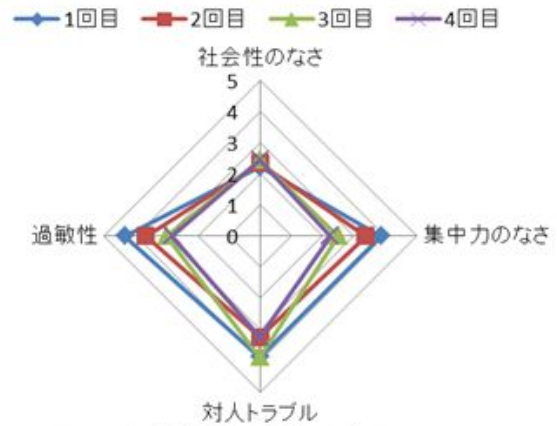


図10 行動特性の推移(3歳男児D)

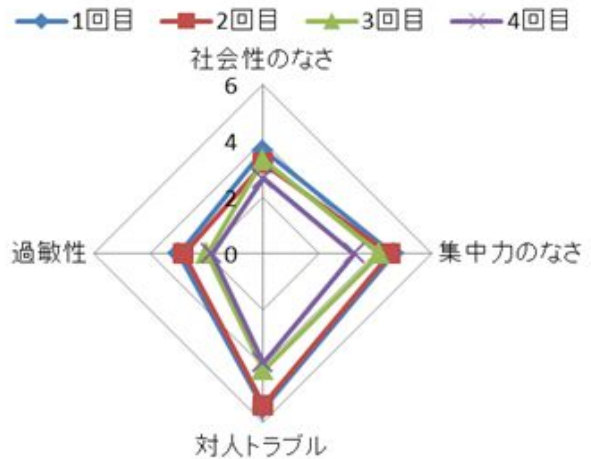


図11 行動特性の推移(3歳男児E)

(7) 気になる子どもと生活習慣

生活習慣の実態

生活習慣に関する項目について、「朝食を食べてこない」に対し、よくある、ある、時々あると回答した者の割合は全体の8.5%、「起きる時間が遅い」では全体の14.9%、「寝る時間が遅い」では全体の34.9%にみられた。「寝る時間が遅い」は年齢による差が見られ、2歳児は5歳児に比べ割合が有意に高かった。

気になる子どもと生活習慣

生活習慣に関する項目の回答割合を気になる子どもと健常児で比較したところ、「朝食を食べてこない」、「起きる時間が遅い」、「昼寝をしない」において気になる子どもの方が「ある」と回答した割合が有意に高かった。就寝時刻は親の世話の質に関連しているとされるが、起床時刻や午睡習慣は自律神経系との関連が想定され、気になる子どもの生活習慣は整いにくい傾向が示唆された。

(8) 気になる子どもと親子関係

親子関係の実態

親子関係に関する項目について、「子どもとの関わりを楽しんでいる」に対し、よくある、ある、時々あると回答した割合は全体の95.1%、「子どもの話に耳を傾ける」では95.5%であった。一方で、「睡眠に関して気にしている」親は12.8%にみられ、0歳児、1歳児は5歳児に比べ、「ある」と回答した割合が有意に高かった。また、「食事に関して気にしている」親は19.6%にみられ、0歳児、1歳児は5歳児に比べ、「ある」と回答した割合が有意に高かった。これらはいずれも、夜泣きや偏食に代表されるような幼児期前期の子どもに特徴的な子育ての悩みであった。また、「子ども同士の関わり方に関して気にしている」親は23.5%にみられた。さらに、「子どもとの関わり方に困っている」親は23.0%にみられ、1歳児は3歳児に比べ、「ある」と回答した割合が有意に高かった。このことは、自我の芽生えから自己主張が強くなり始める子どもに対し、関わり方に戸惑う親の姿を示唆するものと考えられる。一方で、「子どもへの関わり方が中途半端である」親も23.4%みられた。

気になる子どもと親子関係

親子関係に関する項目の回答割合を気になる子どもと健常児で比較したところ、「子どもとの関わりを楽しんでいる」において、気になる子どもの方が「ある」と回答した割合が有意に低かった。反対に、「子ども同士の関わり方に関して気にしている」、「子どもとの関わり方に困っている」親は、気になる子どもの方が、「ある」の回答割合は有意に高かった。その一方で「子どもへの関わり方が中途半端である」親も、気になる子どもの方が、「ある」と回答した割合が有意に高く、「気になる子ども」の親は子どもとの関わりに困難感を感じる者が多い一方で、子どもへの関わりが中途半端と評価されるものが多く、親子関係の問題も示唆された。

「気になる子ども」のアセスメントツールを年齢毎に作成したことにより、保育士が「気になる子ども」の特性を客観的に評価し子どもの潜在的ニーズに気付くことが可能となった。したがって、本研究の成果は保育園において発達障害やそれに類似する特徴を持つ子どもの早期支援の場としての機能を果たすことに寄与すると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計1件)

Akiko Tsuda, Rumiko Kimura:

Development of assessment tool used by the nursery teacher at nursery for "children with special care needs". 15th World Congress of the World Association for Infant Mental Health, (Prague, Czech Republic, May 29 - June 2, 2016)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津田 朗子 (TSUDA, Akiko)

金沢大学・保健学系・准教授

研究者番号: 40272984

(2) 研究分担者

木村 留美子 (KIMURA, Rumiko)

金沢大学・保健学系・教授

研究者番号: 90169946

増田 梨花 (MASUDA, Rika)

立命館大学・応用人間科学研究科・教授

研究者番号: 70409316

福井 逸子 (FUKUI, Itsuko)

金沢星稜大学・人間科学部・准教授

研究者番号: 60390374